

美剣つかさ

討魔刃姫

小説 瀧澤 春

挿絵 MISS BLACK



第一章 蝕まれる日常

006

第二章 孤独と情欲の狭間

053

第三章 煩悶の学舎

100

第四章 蝕まれる純潔

155

第五章 躰られる過去 奈落の未来

205

登場人物紹介

Characters



みつるぎ
美剣つかさ

薙刀を操り、妖魔を討つ少女退魔士。勝気で、素直になれない性格。恭介とは幼馴染で許婚。艶やかな長髪をポニーテールにしている。

いちのせきょうすけ
一ノ瀬恭介

つかさの幼馴染であり、許婚であり、退魔のパートナーである少年。

ロード

残忍で狡猾な上級妖魔。

「触るなあッ！ 触るう——ヒヤアアッ!!」

下腹部に近いこともあるが敏感な股部分への刺激は、清らかな肉体にとつては忌むべき屈辱感となつて弾ける。刺激されるたび、オーバーニーソックスに包まれた美脚がヒクヒクと痙攣した。どれだけ強情を張つても、神経までは誤魔化せない。

そこへさらなる感覚が、横槍に入る。

蛇頭が触手を二本、制服の腋口へと差し込んできたのだ。二本の極細触手が、極上の張りを誇る柔胸を弄る。制服ごしに、触手の動きが透けて見える様は淫靡な光景だ。

「あつくッ！ や、やめろ……アアッ」

さらに両手で乳房を掴まれ、触手と舌で生乳を弄られる三重責めに眉を擡めた。

「ううッ……うむう……ウウウム……ッ！」

退魔女士はそのシャープな輪郭を震えさせ、自分の身体から立ち上る女を意識させる汗香に、意識を揺らめかせてしまう。極細触手で乳房の輪郭を舐られ、粘液を擦りつけられると、その部分が火傷したようにヒリついた。

『ケケケエ、カタチイイ崩レエノナイイ、立派ナア、オチチイイジャネエカアア!』

お乳などという下世話な言葉で身体を評され、少女は恥辱に臉を震えさせた。

「う、うるさいっ、下衆ッ!! だまれえッ……!」

つかさは自分でも余裕がなくなってきたのを自覚していた。さっきまで腕を舐められようが、太股をなぞられようが嫌悪感しか抱かなかつた——なのに。

甘い痺れを、皮下組織へと感じ始めていた。

(一体なに? ……これは……私の身体は、どうしてしまったのっ……)

退魔一族の跡取りは、自分が今感じているものが快感であることを認識しきれない。いや、本能的には分かっている。しかしそれを理性が受け容れようとししないのだ。

「きゃあっ!」

つかさは突然、目の前に火花を見た。強い圧力に心臓を挟まれるような衝撃が伝わる。

『クチジャ、散々イヤダッテ言ッテルウ割イニヤアア、シツカリ乳首イ、固イナアア!』

蛇頭妖魔の言葉で、自分が何をされたのか知る。あの極細触手がブラの隙間から忍び込んで、乳首を締め上げ、さらに蛇頭の手が同時に乳首を弄ったのだ。

「ひいいいあああつ、やめつ……そんなとこ触つて……許さ——なあッ、うつくうっ!」

下級妖魔に弄ばれる悔しさで頬を上気させる清き退魔士。しかしどれだけ否定や、拒否の言葉をつらねても無駄だ。触手が乳首に巻きついて甘噛みしている上、さらに指でコリコリの勃起乳首をまさぐられれば、快感信号が甘味となって少女の性感を蕩けさせる。

(胸ダメッ……コリコリ、するなあああ……!)

今は乳房の弾みさえ、腹部を抜く波紋を起こす。腹部粘膜に打ちつけられる苦しさと痛みで冷や汗が噴き出して止まらない。制服のタイが鳩尾に垂れて、乳房に挟まれる形になる。そして乳房が揉まれて揺れるたび、タイはパイズリされるように弱々しく震えた。

「!? ウウウ……イヤアアア!」

少女は下腹部から込み上げてくる弱電流のうねりに、伸び上がった。猪頭が蛇頭による乳首の締め上げに連動して、鼠蹊部をつつついたのだった。スカートの裾が大胆に捌ける。

『オオ、ドンドン濡レテキタァア、濡レテキタァア……！』——ご満悦な猪頭の声。

（濡れる……？ そ、そんなこと……そんなはずないっ！ 私は感じてなどない！ こんな奴らに、感じさせられている訳がないッ!!）

しかし股間を弄られるたび、感性が激しくのたうってしまふ。

クチュッ……！ 大胆に舌が動き、ショーツごしに肉裂の位置を確認するように舐めてきた。その時の水音、同時に腹に響く熱湯感に、少女は頭をガクガクと上下させる。

「はうおおおおおッ——!? ウウウウウム……ううぐ、うーむっ……！」

少女は窮地に追い込まれながらも、肛門口を指す妖魔をせき止め続けていた。だがつかさの顔にも、僅かではあるが憔悴の兆しが差し始める。

（私は敗けないっ、敗けるわけにはいかないのよッ！）

しかし、外部からの衝撃の連続に、粘妖は今にも爆発寸前の原子炉のように、不安定な蠢動を繰り返していた。違和感が直腸まで溢れ、精神をジワジワと穿つ。

（どうしてこんなに熱いの……身体燃えるっ……！）

まるで下腹部に熱の塊を抱えているような滾りが、腹中の氷のような冷たさと相まって、少女の神経を侵し始める。脳髓がキリキリと締め上げられるようだ。

『ヤルジャネエエカアアッ、フヒヒヒ……。モオウ、コッチハ随分ナァ洪水ダケドナァ！』



——猪頭は馬鹿そんな声を張って嗤う。

「あ、ああ……そんなッ……うう、ふざけるな、そんなことあるわけない！」

しかし。ぐつちよりと濡れたショーツが鼠蹊部や肉丘に張りつく不快感はない。
(集中しろ、つかさ。これに耐えるんだ……絶対血路は開けるっ！)

つかさは、強い意志の力で意識を踏みとどまらせる。だが全身に飛び火した異常な感覚
たちが産声を上げた今、少女は慣れない快感に少しづつ追いつめられていく。

「感じてきているのだろう。素直になれ、そうすれば楽になれる……」

ロードによる淫欲への誘い。だがつかさはそれを盲目的に信じるほど堕ちてはいない。

「馬鹿にするな！ こんなもので感じるものかっ！」

『ソレナラァ、ソロソロオイカセテエヤルカァ。オ漏ラシモオ見タイシイナアア！』

三妖が目配せした。つかさは熱病患者のように全身に稜くう魔悦に身悶えながら、何とか表情を引き締める。だが次の瞬間。三妖の舌鋒が少女の乳首を、腹部を、鼠蹊部をグツと押し込み、さらに露出した肌を舐め穿り始めたのだ。

チュルツ、チュパツチュウツパツ……チュウツチュパ、ニユルンニユルルウン！

「やめ、うつく、は、激しいっ……ううぐ、気持ち悪い……っ!!」

素肌を吸われ、しゃぶられ、内部に潜むスライムの暴動とも合わさり、少女の魂は今にも身体から乖離しそうになった。直腸全体が粘液妖魔の動きを受けて、空蠕動を繰り返す。
ここで気を抜けば、一息にスライムを噴出してしまおう。

ニルンッニムウッ、チュウウウッ！ チュパアッチュプウウッ！

それでも耐え続ける少女の細身を、やがてかつてない感覚の突き上げが襲ったのだ！

「ふああ、ああ、ひゃああああああつ!!」

ピユツつ、しゅつ、ぷつしゅう……！ 全身を貫く大きな電撃の波に襲われ、下腹部に尿意のような戦慄と、生温かい飛沫を覚えた。

熱い迸りに腰椎が蕩けるように甘く擦れてしまう。

「ううッ……ひいうつくッ！」

乳頭、臍、下腹部へと異色な突き上げが爆ぜ、つかさはポニーテールをちぎれんばかりに振り乱した。胃袋を今にも引き裂かんばかりに粘妖が上へ下へと転がり回る。

(やあ、なんなの……これッ！)

体内をぐちゃぐちゃに攪拌されるような脅威に、全身から滂沱ぼうたな冷や汗が噴き出た。

少女は身体が浮き上がるような感覚に戸惑う。

「ヒィィ……ううつ……ウウ！」

毛穴が開き、そこへ冷気が殺到してくる。意識が凍らされ、一瞬後どろりと溶けていく。

(う、あう。妖魔の隙みいつけ、ろつ、つかさ、ぜったいこいつらにも隙ができるっ……！)

軽い浮遊感が尾を引き、疲労感が重量となって全身にのしかかった。それでもまだ諦めない退魔の乙女。

「クク……。気をやっておきながら、それでも我が妖魔を放ひり出さないとッ」

ロードの哄笑が、つかさにはとても遠くに聞こえた。妖魔は舌の動きを止めている。

「と、当然だッ……妖魔なんかの、思い通りに誰がなるものかッ……」

しかしその勝利感はずぐに消えてしまう。それは突然身体を引き起こされる力の流れを感じたからだ。

「これで終わりだ、つかさッ」

少女は、自分がいつの間にか水平から上体が起き上がっていることに気づく。いや、起き上がっているのではなく、両腕を拘束していた触手が引き上げられ、自然と上体が起こされていたのだ。制服の裾も持ち上げられ、艶やかな腹部が露出した。

（身体が、ああ、持ち上がって……ああ、脚までっ!）

時を同じくして、足首に絡みついた肉触手もまた両脚を引き上げていた——丁度、つかさの身体をU字型に折るように。スカートがめくれ、ぐੱちよりと濡れたショーツに透けて見える濃いめの恥毛と、秘溝が妖魔たちの眼を楽しませてしまう。

「あああ……あ……あヤッ!」

強烈な歪痛がはしり、丸見えのぼっこり膨れた下腹が凄まじい圧迫を受ける。

「やっ、やめええっ、……やめるおおッ!!」

両腕、両脚を拘束した触手の吊り上げは無情に続く。少女の腹は激しく押され、内臓が逼迫する。猛火の権化のような便意が、つかさの下腹部で激しく逆巻いた。

「うぐう……うむうううう……ッ!」

退魔少女は堅固な精神力を総動員させ、迫りくる恐ろしい排泄欲求に抗う。

(こんな奴らの前で……誰が、醜態などさらすものかッ！)

つかさは強靱な精神力で、激しく渦巻く便意を持ち堪える。差し迫る決壊を押しとどめているのは、紛れもなく退魔士としての誇りだ。

「つかさよ。どこまで耐えられるかな？」

ただでさえ辛い体勢の少女の元にさらに二本の触手が伸びてくる。一本はショーツにひっかかり、尻溝が丸見えになるまでズリ下ろされてしまう。

うんっ!? 囚われの退魔士は困惑に声を震えさせる。だがもう一本の触手の動きで、少女の声はかき消されてしまう。ピシャンッ、とその触手が色白の尻を突然打ってきたのだ。

ヒアッ! つかさは声を上擦らせた。熱い痛みがじわりと柔肌に広がり玉の汗が散る。それがU字屈曲の身体に与えるのは、凄まじい大地震の響きだ。

「あひっ! ひいいあっ! もう……漏れちやうう、漏れちやウからあ、叩くなあっ!」

ピシャンッ! ピシャンッ! 退魔士の誇りを砕くため、六本目の肉触手による艶やかな生白美臀への鞭打ちは何度も繰り返された。そのたび白い桃尻に赤い鞭痕が刻まれる。

「やめろッ! 叩くなッ——やめろッ!! ……んひんう!」

美臀肉が叩かれ、しつとりとした脂肪が波打つ。そのたび骨身を灼くような痛みが、腹中のグルグルという不協和音と一緒に胎内に反響するのだ。

「ムグッ! うううむ……うーむうう、ぐ、ぐぐう……ふああああ!!」

「うう……みるなあ……や、やめろッ」

少女は呼吸も荒々しく言うが、それに応えるのはゲラゲラという嘲笑だ。どれだけキツイ視線を送ったとしても、まんぐり返しの体勢では全く迫力が出ない。

さらにブルマをずらされ半尻にさせられ、アナルまで少年たちの好奇の視線に晒される。「何言ってるんすか、こんなにエロいうんこ孔ヒクヒクさせちゃってっ！」

排泄孔は締めなくなりパツクリと開き、通常ならば慎ましく隠れているはずの腸粘膜の奥底までを披露していた。菊皺という猥雑なルージュに縁取られた腸の鮮やかな鶉色は、そこを汚物が通ることが信じられないほどに美しく、艶めかしい。

「そればかりか今その孔には黄ばんだ腸汁が、湖水のように満々と蓄えられているのだ。」

「い、いやあ……ンゲ……み、みるなあ……やめろお……ああはおんっ！」

つかさは喉を痙攣させながら呻いた。おぞましい妖魔に深く抉られ、ヒリヒリして充血したいやらしい排泄孔を覗かれて今にも狂ってしまいそうになる。

「何だ、この汁？ えろろ……くんちゅうっ」

「うっひいひいっ!!」

腸汁を飲まれ、睨が裂けんばかりに眼を剥き出し、少女は被虐の呻きを漏らした。

「ずずず……ジュルルル！ うへえ、甘くてうめえっ！」

少年が唇をアナルに寄せ、満々と充たされている腸液を勢いよく飲み込む。舌をうねらせ、唇を窄ませ、頬を凹ませ、汁の残滓が盛大に飛び散って神聖な道場を穢す。

「だめえ……吸うの、いひゃああつ……ひゃううう……ッ!？」

腸液が吸られる恥辱と、同時に腸粘膜が外部へと掻き出されるような吸引快に、胎内を寒波が吹き抜け、ゾクゾクと魂まで震撼した。

「いやだあ……ああ、吸わないで……ヒイ、ヒイイ……吸っちゃいやああ……っ!!」

腹の中を幾万のペロでくすぐられるようなおぞましさに、腹筋が怯える仔羊のようにカクカクと痙攣してしまう。

「ほほおおおおおおおおおおうう!!」

少女は突然陰部をまさぐられ、皮剥けの肉芽を親指でいじられる。

(だめえ、お、おかしくなる……そんな触られたら……お、おかひいくう、だめええ!)
頭の中にふいごで直接熱風を送り込まれるような灼熱に、意識の裾野を焦がされる。

「先輩のおまめ刺激すると、けつ汁がどんどん溢れてくるぜ……んっ、ソウ……っ」
少年は脂でテカテカ光る顔面を、剥き卵のように淡い白さの臀部にヌリヌリと擦りつけながら、わざとらしくズズズズズッ、とはしたくない濁音を響かせる。

「よせ、……いやだ、こんな恥辱……ああ、殺せ! 殺せえええっ!! ひいつ……」

少女は未踏の屈辱に死を望んだ。いくら肉体的、精神的な鍛錬を積んでいるとはいえ、己の腸液をグビグビと飲まれるというおぞましい行為に耐えられる訳がなかった。

「だめだめだめ……も、もうおかしくなるっ! ひっ……あつっひゃうう……!!」

まるで身体の器官を吸い出されているようだ。寂寥感と虚無感の海に身も心も放り出さ

れ、少女は挿入悦と排泄快を味わった糞孔で、吸引愉をたっぷり教え込まれてしまう。

「吸っちゃいやっ！ これ以上、あひ、ひっ、ひぐっ、ひゃうう……とぶうンッ！」

凄まじいバキュームに、背骨を青紫の電流が貫き、目の前が真っ暗になった。

押さえつけられた太股を、カエルのように動かして、痙攣する少女。膣でカッと火柱が立ったかと思うと。

ビュッ、ビュビュビュッ——！ 乙女は盛大に羞潮を噴き出させ、瞳に泪を光らせた。

どれだけ吸われても、粘膜がジクジクと疼けば滾々と腸液が溢れ返る。

（私はこのまま吸われつづけるの……いや、狂っちゃう……このままじゃ、ほんとうに）

しかし突然男の淫らな気配が遠のいた気がした。いくら待っても、近づいてこない。
（ど、どうして……どうして何もし、しないの……？）

誇り高き退魔士として今まで抗ってきた少女が考えるとは思えない乱れた思考。それは清廉な心が確実に黒く染まっていることを表わしていた。

つかさは拍子抜けのようなものを覚えてしまう。今までの犯しがハードだっただけに、突然に訪れた空虚さは拷問に等しい。身体の中の性の炎が不完全燃焼のまま身体を蝕む。

『男どもの精液がほしいのだろう？ ならば、求める……乞えッ』

少年たちは淫気に理性を忘れ、妖魔がその淫気をコントロールしているのだ。

少女の身体から抜け落ちた蚯蚓がわめく。密度の大きい淫気に、精液渴望は激しいうねりとなって、つかさの心の襞を沸かす。

(乞うてはダメだッ……求めるなんて……私は退魔士だ、本当に敗けてしまおうっ)

必死に沸騰する淫欲を押し込めようとするつかさ。だが少女の内に芽生え始めた淫らさは少年たちが淫気に自失していることを素早く見抜き、それがつかさの背中を押す。

(ダメだ……こんなこと、している……は、はずが……な、ない……あ、ああ……)
込み上げてくる妄想。彼らは正気ではない。記憶も曖昧なはず――。

(つかさ、言うな……言っては……いつてはっ……)

退魔士としての矜持の糸がゆっくりとほつれ、唇が欲望を吐瀉せんばかりに痙攣し、やがて歯列が剥き出しになり、痴声が声帯を揺らす。

「ほ、ほひい……ンウ……せえいえひい……こっへりひたあのお……ほ、ほひい……」
思考と行動との不一致に魂が軋み、耐え続けた心が刹那、決壊した。頭は精液の爛れた白さに覆い尽くされ、まるで麻薬中毒者のように何も考えられなくなってしまう。

(言っちゃった……ずっと……がんばって耐えてたのにいっちゃった……)

溢れた唾液が唇を濡らし、ぼつて膨らんだ唇を甘美に輝かせた。

「へへへ、先輩のおま○こ味わるるなんて、うそみたいだぜッ」

獣性を剥き出しにする少年たちのおぞましい欲望に、少女は愕然としながら首を振る。

(ダメッ！ おま○こはダメ……そこは恭介の……)

少女は少年たちの興味を逸らさねばと、グラビアアイドルが前傾姿勢で胸を強調させるポーズをとる。汗と体液でヌラついた体操着が素肌に密着して乳房を搾り、クイと持ち上

げた桃尻を浮き上がらせた濃紺ブルマをプリプリ振ってみせる。自分の理性からプライドが卵の殻を剥くように崩れるのを感じずにいられなかった。

「ンッ……んううう……こ、こっちに……お願いい……こっちに、お尻にしてッ！」

猥褻に腰をプリプリと振りたくり、扇情的にひくつくせピアの排泄孔をアピールする。まるで自分が売春婦になったかのような狂おしい錯覚を覚えてしまう。

「何だよ、おまんこは主将専用ってか……ま、先輩にぶちこめるならどこでもいいけど」
「ここならいくらでも射^たして構わないからッ……」

美剣の少女は自らの卑猥に綻ぶ肛門の窄まりを指でぐつと押し広げてアピールした。そのたびに破廉恥な自分へ心がズキズキと痛んだ。しかし体内で暴れる精への渴望を抑えき
ることはできなかった。

妖魔に鍛えられた性感は熱く灼けて、ビクビクビクッと脚は痙攣し、腸汁がゴボゴボッと垂れ落ちてしまう。

「まあ、先輩の頼みとあっちゃあ、存分に糞孔をいじらないと悪いからな」

少年たちは女を犯すためだけに存在しているような精力漲った獣根を取り出した。

(ああ、このにおいいい……ッ!!)

少年たちの一度精を放った時の残臭と、先走りとは螺旋状に絡み合う。つかさは鼻に皺を寄せて眉を撓めた。

「いくぜ、先輩ッ」

「こ、ここ……ここおお……つおおお……あああ!？」

勃起が窄まりへ食い込む。一気に巨大な質量で括約筋を押し広げ、つかさの顔を地面に這い蹲らせ、尻穴を激しく突いた。途端ワアア……と、血潮が嵐を目前にした海面のように唸りだす。

グチュッ、ズチュ、又チュッ、グチュグチュグウウウウ……!!

「あひああうう……だめ、うう、だめ……あ!」

前傾姿勢のまま崩れそうになるほど、勢いのあるアナル挿入だった。

おかげで理性が僅かに目覚めるも、そのせいで余計に苦悶の度合いは強まってしまふ。

(ああ、太い……太いの……ああ、すごい奥までみっちり広がっちゃってる……!)

自らの排泄孔がみるみるうちに男を呑んでいる。それだけで脊椎が燃えた。

「おっ……ほっひい……ッ!」

つかさは深い溜め息をつくど、左右から押し出された逸物をグッと両手で掴む。トクトクッと血潮の感触が響き、子宮が下がってきた。排泄を埋める肉棒がその存在感を増す。

『胸を使わせたらどうだ……ゲゲゲ。感じすぎて、苦しいのだから……!』

「ああ、いやなのに……あ、あああ」

身体は発情していた。ズッシリと四肢を拘束する鉄鎖のような淫気に抗えなかった。頭へと勝手に浮かび上がってくる言葉を朗読する。

「おへがいい、ひいまふうう……アアン……おっぱひい、いじつてえッ!」

少年が汗でぐっちよりと重くなった体操服を持ち上げれば、たっぶりの重量感が目に見えて分かるツンと上向きな美巨乳が大きく撓みながらまるび、噎せる体臭が広がる。

（あ、ああ……恥ずかしい……こんな奴らに、私のえっちな体臭知られちゃってる……っ）
乳首は毒々しい濃厚な染色で、乳房肌のすべやかな球肉は淫靡に紅潮している。だが不思議とどす黒い恥辱や、沈み込むような嫌悪感は込み上げてこない。

「あ、ああ……ン、あふひいン！」

少女は自分が零すにはあまりに甘えた声を上げた。

（気持ちよすぎちゃう……ああ……私、も、もおう……ああ、何を考えている、だめだ、つかさ……だめっ、堕ちちゃう！）

懊悩する少女。しかしすぐ後ろ、アナル刺しの少年が腰を果敢に動かしてきた。

「ら、らめえっ、うごいひひや、らめえええ……！」

腸粘膜が掻きむしられ、鋭い悦びが牙を剥く。鋼のように硬い勃起が暴れ、少女の肉体を容赦なく突き上げるのだ。炎の槍で串刺しにされるような快美の煌めきに、つかさは髪を振り乱して喘ぎ狂ってしまう。

「おいおい、先輩滅茶苦茶感じてるみたいだぜ？」

「おお、先輩のおっぱいデケえよお。それに乳首もいやらしい色してやがる」

少年たちの興味本位の嘲弄が心に突き刺さる。しかし少女は普段なら受け容れ難い言葉の数々に脳髓を痺れさせ、陶然としてしまうのだ。

少年たちは、肉棒を抜いてくれる至福に囚われニヤリと乱れた笑みを浮かべた。

「ひい、だ、だめ……おっぱいのさきつぽ、抓っちゃだめええ……！」

首を横に揺するが早いか、左右から少年がいきなり乳首を押し潰してきた。仰向けになつても形崩れ一つしなかつた胸肉が猥雑に歪めば、稲光が快感中枢に突き刺さる。

「や、やめて……はひい……とれちゃうう！ ちくびい、と、とれひゃううう!？」

たわわな乳脂肪は豊かに乱れ揺れ、少女は肺の空気を一気に吐瀉して噎せ返る。ポッとその表情に火がついたかのように紅潮が差し込んだ。

「すげえ、先輩のおっぱいプリプリモチモチしてめちやくちやきもちいいぜえっ！」

つかさの扱きに快感を露わに呻く。少女は少年たちに突き動かされ、今にも恍惚の彼方へ意識が吹き飛ばされてしまひそうだ。

「へへへ、ホラ美劍先輩ッ、俺の、ほしいんじゃないですか？」

少年は意地悪く笑いながら、直角にそそり勃つ肉棒を迫り出す。

「おちんちん……ああ、うう……」

つかさは上体を持ち上げ、肉槍をゴム鞠のような乳房で包み込み、慈しむように奉仕する。溢れ出る先走りで肉胸がいやらしく粘つき、乳房の内側が痛いほどに張つた。

(あついい……ああつ、からだ……熱いの擦りつけたら……だめになるのに……ッ)

退魔乙女は込み上げる屈辱感に息を切らしながら、瑞々しい肢肉を弾ませた。

「んちゅ……チュパッ……んふ……ンチュルルルルッ……！」

理性と淫蕩の境を彷徨いながら、少女は少年の鈴口を啜る。

「先輩、すつげえ精液クサイですよ。毎日主将とハメあったあと風呂はいつてるんスカ？」
別の少年が身体を乱暴に愛撫しながら、つかさの身体へ鼻頭をぐいぐいと押しつける。
「におひいっ……だめえ……へえうう……」

潔癖な退魔士にとつて変容した体臭を指摘されることは、身を切られるほどに辛い。

勝手に、淫猥に腰が動く。娼婦のようにいやらしく手を使い、喉を鳴らし、血も煮え立つような疼きに耐えかねて全身をうねらせてしまう。

「へへへ、後ろにはまだ余裕があるみたいですね、先輩っ」

少年の声と同時に、アナルへさらなる圧迫感が襲ってきた。おしりが鈍でかち割られるような激しい苦悶に額が皺を刻んだ。

「な、なに……いや、おしり、こ、こわれ……ひいひいひい——ッ」

身が業火で灼かれるような肉悦に少女は叫ぶ。少年の勃起だけでめいっばいに広がっているそこへ、さらに蚯蚓妖魔を突っ込まれたのだ。

（敗けちゃだめなのに……ひいひい、か、感じちゃうう！）

歪に、おぞましく膨れた排泄孔はおいしそうに全てを吞んでしまう。括約筋が消えるほどに引き伸ばされた。四つんばいの身体がビクビクと懊悩に震えてやまない。

メリ、メリメリメリッ！ 括約筋が分解されていく。

「おお、おおっ……先輩のアナルすげえ！ こんなぶつてええモンなんだぜ」

ズブリユ、ジュブグッ！ 粘膜を掻き分ける肉太な男根そして蚯蚓の胴部。粘膜が全く異なる、しかし立派な異物に性感帯を貫かれ、腸液がびちゃびちゃ床に飛び散った。

『ゲゲゲゲ……かなり感じているなっ。いやらしく粘膜がヒクヒクしてやがる』

蚯蚓妖魔の腫は今、つかさの身体の内を孔が空くほど眺め、逐一声を震わせた。

(いや……言わないで……ああ……私、どんどんおかしくなってしまう……)

少女は腸肉の激しい変化を暴露され、恥辱に唇を噛んだ。

「だめえ、か、感じちゃだめだ……ああ、つかさ……敗けるな……敗け——はああううう、

でもお、すれて……ああ、すごい……太いの……だめなのに、すごすぎるのッ……！」

熟成された禁断の肛悦に、退魔士は段々と泥濘に脚を囚われ始める。

『ゲゲゲゲ……全く人間は、妖魔よりも恐ろしいやつらだ。俺を責めの道具に使うとは……

……しかし、お前の肛門の締まりが急によくなくなったぜ』

「主将にも、先輩にも憧れていたのに……こんないやらしいアナル女だったなんて」

夕立のような勢いの精液を浴びた身体は罵倒されるだけで快美を覚えてしまう。

(言うな……言うなあっ……！)

「そんなことない！ 恭介とそんなことし、したことなんて……ふああああ!!」

やがて蚯蚓胴体の無数の突起、そしてそれと並列挿入されていた勃起が一斉に膨れ上がる。粘膜を押し上げる暴圧感に、少女は目を大きく開けた。

『ゲゲゲゲ……たっぷりと俺の精液をためえの身体の中に塗りつけてやる！』

それはまるで無数の拳が身体の中に突き込まれるような、普通の人間にはありえない凄まじい衝撃の連続。そして瘤一つ一つがカッと火花を散らせば。

ドビュドビュッ、ビュルルルルルルルルルルッ……！ ビックウツツツ——！！
吐き散らされる灼熱に、つかさは煩悶の喘ぎを轟かせる。

「あひいいいいい……」

同時に今までの淫らな指遣いに触発された少年たちも腐肉を思いつきりつかさの掌に、乳房の内側肉へと突き刺してきた。

（だめ……とぶっ……ああ、熱くておかしくなっちゃう……ッ）

つかさの全身の粘膜は引き攣り、熱く痺れた。腸腔粘膜はドロドロに蕩けて腸汁が水飴のように絡み、乳房も内側が痛いほどに痼り、秘唇も愛蜜を零しながら、空蠕動を繰る。

「……先輩、受け止めてくださいよッ！」——少女の手の中が熱く疼いた。

「おお、もういくう……」——少女の胸を左右に押し開く勢いで熱化が強まる。

ビュッ、ビュルルルッ！ ビュグッ、ビュックッ……ドビュルルウウウウンン！！
「あああとろけちゃう、身体……ひいいい、と、とろけひゃうう！」

ビクッと両肩を大きく跳ね上げて、絶頂痙攣に身体をビクビクとひくつかせる。まるで光化学スモッグのような濃密ないがらっぼさに、つかさは虫の息だった。

（え……あ……ウソ！ 出したばかりなのに、まだ大きい……ッ）

目の前の隆起はもちろん、依然肛門を貫く蚯蚓の逞しさ、強靱さに驚愕した。



「へへへ、先輩まだまだ頑張ってくださいよ！」——パイザリの男は、子どもが泥団子をこね合わせるように少女の乳房を激しく掴み、乱暴に自分の剛直へと擦りつけた。

「ひいあつ……痛い……おっぱい……やめへえ、おっぱひいひやい……！」

胸を揉まれれば自然全身が揺さぶられ、身体中に吐き出された精液が身体の中で揺れ動く。少女は精液を浴び、吞まされ、泥酔状態で頭は白光に押し包まれてしまう。

「ほら、早くしろよ！ こつちもつかえてるんだぜっ!？」

少年はすっかり絶頂の余韻で力の入らない指を放棄し、少女のふつくらと発酵したパン生地のような蕩ける柔らかさそのままの頬へグイグイッと押し込んだ。

「やあつ……あウウン……ッ！」

鈴口から今も噴き出す精液の残滓を頬へ塗りたくられ、残酷な顔パックに悶絶する。まるで全身が性器のように突きつけられる旺盛な男根に吸いつき、快感の炎に巻かれた。

「いくぞ、また射すからな、先輩ッ！」「今度もしっかりと味わってくれよ」

ぱっくり開いた鈴口が顔面に押しつけられ、肺へドッと忌まわしいホルモン臭が駆け下ってくる。押しつけられる亀頭粘膜の意外な柔らかさに悪寒を覚えて総毛立つ。

「ンッ……ンンンン……！ ングウッ……！」

激しく分泌されたアドレナリンが満ち潮となって、理性の岸辺を覆い尽くしてしまう。同時にアナル刺しの少年も動き始める。たまらない性感帯が疼き、抽送されればたちまち悦楽に蕩けてしまう。

(そんな、いや、……あたまっ……ひう……お、おかしくなっちゃう！)

カリが、蚯蚓の突起が容赦なく突き刺さり、火の玉を身体に打ちつける。

「ああ、いや、もうお願い……だめだ……狂っちゃう……ああ、そんなについたら、ああ、く、くるっひやうう……！」

肛門を削られながら、少女は顔面奉仕を強いられる。少年の肉塊を柔らかな臉や鼻っぱしへグイグイと容赦なく、けだものの乱暴さで押しつけられる。入り口は痛々しいほどに膨らみ、菊皺は完全に伸びきっていた。しかし溢れる腸液はとどまることをしらず、その匂いは一層濃密なものになる。

「ううう……ああ、つ、つよい……ううう、ううううんんん……！」

無数の精液が野太い糸を引いて、淫らに煌めく。

同時に男根は射精寸前の膨張に震える。そして目の前でスパークリングワインが弾けたかのように、何もかもが爛れた白さに飲み込まれてしまう。

ドビュルルル、ビュクウウウ、ドビュ、ドビュルルル、ビククウウ——！！
一斉に噴き出した極熱の精液雪崩。

(あああ……！ 精液で息が……で、できない……のに、き、きもひひい……っ)

精液が顔に当たると、頭蓋が揺さぶられる鈍痛がけたたましく響くのだ。精液が鼻孔から胃袋へなだれ込めば、妖樹に長い間かけられた精液強制嚥下の拷問の記憶が回帰する。

「ほらほら、先輩舌の動きが全然足りてませんよッ、美剣先ばい！」

子宮奥がひどくざわめき始め、急激な排泄感が襲いかかってきた。胎内で何かが激しく動き回るおぞましい感触だ。

「でちゃうッ……アアッ、なんか出ちゃうッ!?」

少女はストレートヘアをザックリと背中に流す。ツルツルした胎内、襞肉を蠢く異物の感触に仰け反った。

「アアアアア—— ツツツツツ!」

ブビビイッ。甲高い音を立て愛液が迸り、小陰唇を押し出すほどの質量が子宮口を押し広げていくのが分かる。少女の四肢は限界まで伸ばされたピアノ線のように伸びきった。

何、これ……なんなのっ!? 柔褌から幾つも小さな火花が散り、骨盤が歪む。子宮とラピアを魔羅で掻き混ぜられるような圧迫感と、激流感に全身が灼けつく。

(なんか、でちゃう……きちゃう! ああ、いや、なにコレエ、いやいやあッ……!)

少女は呼吸ができないのか、それとも感じていいのか分からないほど呼吸を荒げ、全身を揉みしぼる。色気でむっちりと張りつめた桃尻がいやらしく揺れ、愛液が滝のように分泌され腿を濡らした。

「あ、いやああ……恭介え、見ないでえええええええッ!」

排泄という屈辱的な、そして恥ずかしくない行為に少女は狂ったように叫んだ。

膣がグッと押し広げられる。それは恭介のものがつまらないと思えるほど強大な異物感。「くくく、見る、恭介。お前の知らぬうちにつかさの受けた苦悶の証をッ!」

頭の中を真っ赤な鎌が駆け抜け、思考の裾野が灼ける。

アキヤアアアアアアアア……！ 少女が全身をビクビクッと痙攣させたその時。

ロードの手によつて膣からズリズリッ、と蠢きの正体が引き出された。それはまるまると太った妖蟲。それが今産み落とされ、夥しい愛液の中で藻掻いている。

恭介は胎内から生まれ落ちた妖蟲に、幼馴染の純潔がどれほど狂おしい状況下で強奪されたのかを知った。

「あ、ああああ……ああ……うう……ん……」

一方少女は、子宮から炎を排泄したような灼熱感に身を振らせながら、排泄の生む倒錯的な悦びを感じてしまっていた。鬩口は魔蟲の太さだけ開ききり、今なら愛汁のせいで淫らに輝く子宮口の奥の奥まで覗けるだろう。

「つかさお前、それ……妖魔にやられたのか……？」

恭介の声には、少女に否定してほしいという感情がありありと窺えた。だからこそ余計に退魔少女は答えることなく俯くしかない。そうやって蟲姦に感じ入った自分を恥じ入ることしかできなかった。

「ククク……。いっぱいエッチな汁を漏らして……。そんなに私のものが欲しいか？」

つかさは焦点の合わない瞳を虚空へ向けながら、ゆるゆると首を振った。恭介の存在が、恭介の精子を受精した事実が彼女の最後の支えになり、陥落を防いでいたのだ。

しかし四肢には力なく、憎き相手にしなだれかからざるをえない。

子宮口はゆっくり下りてくる。身体全体が処女を散らした妖魔を欲している気がした。
（私、妖魔のを欲しがってるの……？ 恭介ではなくロードを……？ そ、そんなことないッ……あつてはだめ……だつて、私のお腹のなかには……恭介の赤ちゃんが……）

「ひぎいいっ……！」

頭が熱病に冒されたように爛れている時に、アヌスに異物挿入を覚えた。身体の奥底から湧き上がってきた紅い閃光が、膣の裏で爆ぜる。

グリグリッとロードの指先が乱暴にアヌス粘膜を刮ぐ。それなのに、少女の身体は確かな快感を覚えてしまう。口いっぱいに酸っぱいものが広がった。

「や、やめへええ……あああつ、きよ、恭介の前では……や、やめええ……」

最大の弱点を刺激され、退魔少女は啼き噎せる。ロードの指先に括約筋はキュッキュッと愛おしそうに吸いついて奥へ導く。そのたびに排泄穴はほっくりと膨らみ、甘くたるんだ。菊皺は今までの拡張行為によって散々引き伸ばされ、すっかりその刻みは薄かった。

「でちやうう……はああああ……お尻から、で、でふううっ！」

ピチャッ、ピチャブチュウ。何度も臀粘膜を穿られれば、真っ白な腸液がまるで牝蜜のように零れ出てしまう。排泄孔から汁が分泌されるだけで、排泄快感が容易に引き出されてしまう。妖樹の影響とはいえ、異常な生理反応を前にかさの理性は溶け崩れそうだ。

（抵抗しなくちゃい、いけないのに……どうして身体、動いてくれないの……！ 私の身体は逆らえないの……）

アヌスを穿られただけで隷従感が身体を充たし、全身に溢れ返る。粘膜は指を挿れただけで従順に蕩けて、肛肉全体が激しく蠢動を繰り返す。

「ああ、やめてえ……恭介がいるのにほじつちゃ……つう……恭介、みないでえ！」

大粒の汗を流しながら、ぼーっと目の辺りを紅潮させるその様は発情した牝そのもの。理性のお陰で正気を保ちながら、地獄の黒炎に炙られ身悶える姿は痴態の極致といえた。

「フフ、すっかり牝らしくなったな。ククク……すごい締めつけだぞ。お前の臀はっ」

ヌポッ、ズブッ、ズブッ……！ 貴公子は差し込んだ人差し指で抽送を開始する。

う……ん……んつく！ 高速のピストン運動に、腸粘膜は一つの輪っかになりながら伸縮を繰り返す。強烈な肛悦に子宮がコリコリと硬くなっていく。

（はあん！ こんなことに敗けない。ここを抜け出して……私は恭介と一緒に……ッ）

少女は自分のお腹に宿った命を守るために耐え抜く、強い意志をみせる。

「おまえなんかの手に堕ちるものくう、私は……わたしは……ンンうううう……ッ」

少女はアヌスを苛烈に責め抜かれても、必死に悦楽を拒否しようとした。

ここで踏みとどまらなければ全てが潰えてしまう。だが身体で覚えさせられ、魂を震撼させる快楽の牙は確実に、つかさに勃起への崇拜の念を想起させていった。

「つかさ！ お前には俺がついてるからっ!!」

幼馴染の快楽に浮かされる姿に、恭介が叫びを上げる。

（あ、ああ……きょうすけえ……そうよ、私には彼がいる……恭介がいてくれるっ）

今はもう独りではない、そのことを教えられているようだ。瞬間ロードは腸液でベチョベチョになった指を引き抜いた。

しかし少女は唇を噛みしめて喉を広げた喘ぎを押し込める。

「……そうか、そんなに恭介の子が大切か……私ではなく……」

そこには今までのような見下すような、余裕ある揶揄はなかった。

静かな怒気がゆつくりと呼気として吐き出されていく。黒い嫉妬の気配だ。

ロードはつかさの背後から、パンパンに勃起した陰茎をぐいっと肉孔へ擦りつけてきた。

ああ……。つかさの淫水に満ちた媚門は痙攣し、奥へ引き込もうと勃起へ吸いつく。

（私いっぱい犯されてしまうの……。いや、……。これ以上犯されるのは……。ダメっ）

このまま再び身体がバラバラになりそうなほどに犯されてしまったら、悦びの虜囚になつてしまうのは火を見るより明らかだった。

つかさは奥菌を食いしぱり、ロードを睨みつける。だがヒクヒクと愛液を零していた秘

唇をこじ開けられれば、胎内は期待で泥のように蕩けてしまう。

「あひゃああああああああ——ッ！！！！？」

ズブブッ！ 強大な質量の衝撃に、退魔少女は喉を反り返らせて嬌声を上げた。

頭の中からは決意が吹き飛ぶ。鋭かった視線は花の蕾が綻ぶように緩まり、グズンッと身体の奥へ刺すような衝撃に、つかさは眼を見開く。

「子を孕み、機先を制したつもりか？ いいか、お前は奴隷妻だ、主人は私なのだ!!」

「ふ、ふざけないでえ……あ、うん……誰がお前なんかの妻になるものか……私はお前を斃して、恭介と一緒に元の世界に戻るッ……ふああん！」

必死に抗う。だが緩いピストンで膣をほじくられるたび、恭介の肉棒の感触と比べてしまい、つかさの身体は燃えるような昂奮を覚えてしまう。その上乳房や、臂をねちっこく揉まれてしまうのだ。肌がぼうっと火照り、白のドレスと相まって甘美に匂い立つ。

（私は……ああウンっ……恭介のためにも、ま、敗けない!!）

魂からの叫びは、ロードと同時に自分自身の身体の中に巣くう、犯されたがっている心へ向けられていた。

（敗けない……絶対に、私はまけないから……!）

何度も突き上げられ、膣は問答無用に拡張されていく。精力の逞しさに子宮がキュンキュンと高鳴った。これは恭介では感じられなかった雄々しさだ。

妖魔の精力の強さ、ピストンの押し引きの凄み、子宮を刳り貫かれる衝き上げ——全てが人とは比べものにならないぐらいに圧倒的なものばかりだった。

（だめえ……くらべちゃだめ……エッチなこと考えたら、敗けちゃうのにイ……ッ）

「どうした、やはり愉しんでいるのか。膣がぐいぐいと私のものを締めつけてくるぞ！」ズブッ、ピチュッ、ヂュッ、ズウウン！ 溢れ出る本気汁。強烈に媚肉を攪拌して行く苛烈な杭打ち。襲の一枚一枚に灯っていた淫火が轟々と唸り、快美が吹き荒れた。

「そんなことない……ふわあ……アアッ……やめっ……やめ……うん……ッ！」

苛烈な襲肉掘削を施されながら、耳元で妖魔がささやく。淫靡な声に耳まで痺れてくる。

「妖魔の精液は他者の精子を喰らうのだ。それがたとえ受精していたとしても……分かるだろう、つかさッ。お前の子は我が精子に喰われるためだけにこの世に生を受けたのだ」

「そんな……そんなこと、させない。恭介の子は私が守るんだから……守ってみせる」

希望と仰いでいた恭介との子が消える。絶望的な極刑審判に少女はだだっ子のように首を振った。しかしズンズンと襲を大振りで穿たれば、女の悦びは否定しきれない純度で急速に心と肉体とを蕩けさせる。あまりの突き上げにベールが下がり、白い顔を隠す。

「うう……ん！ ふわあ……ああ、やめ……ろお……ああんッ」

少女は必死に魔の拘泥から逃げ出そうとする。しかし子宮口が拉げるほどの勢いでロードの肉塊が突き刺されれば反抗の火は弱まり、肉汁が脚を伝って流れていく。

(いやら、敗れたくないのに……どうして抵抗できないのッ!?)

快感に身体が動かない。身体に裏切られた退魔少女は表情を苦み走らせながら、くうう

……と息を漏らす。

「つかさ、お前の希望全て砕いてくれる……そして我が仔を身籠もり、屈するのだッ」

「ふざけるな、ふざけるなああ……ああああん！」

そこへ突然触手が二本伸びてきて、少女の両腕を掬め捕った。途端ロードの方へグイッと引き寄せられ、子宮口と勃起とが食い込み合う。膣の裏で快美の輝きが明滅した。

「ふあ、ああああああ……」

ほんの一瞬脱力した腰元をロードに掴まれ、一気にパ——ンッと腰を叩きつけられる。
「キャウウウウン!!」

漏らしたのは犬のような嬌声。ロードの腰遣いは逞しさを深める。逃げようとしても触手が枷となつて逃れられない。

「おまえのような淫売に人の子を孕むのは許さない。我が仔の母胎となるのだッ」

荒らしいピストンで女の命を斃られ、一際獯猛に子宮口を潰されたその瞬間。射精液を噴火させられた!

ドビュッ、ビュグルルルルッ、ビクッ、ビクビク、ドビュルルルルル——!!
「いや、ヒイヒイアアアアア——ッ!」

恭介のものが、いや、人間のものが話にならないほどの滾りと量の妖魔の精液が怒濤の勢いで、子宮へ襲いかかってくる。

「あああッ……」

恭介の精液が心を潤すなら、妖魔のそれは肉体を焦がす。

「いや、だめ、だめなおお、赤ちゃん、あかちゃんんんッ……」

腔に収まりきらなかつた夥しい汁液が接合部分から爆竹の火花のように飛び散り、神聖な婚礼衣装を穢し、悲劇の花嫁の情感を深めた。少女は四散するスペルマの雫がまだ未完成な赤ん坊の断末魔の悲鳴に思えて心が痛んだ。

「らめえええ、あかちゃん。たべちゃ……恭介と私の赤ちゃんたべないれえええ、ああ、



イ、イク、イククウウウウウウウウウウ——ッ！！！！」

少女は嘆きながら、そして喘ぎながら……何度も白目を剥いて身も心も溶け消えるオルガスムスを味わい、妖魔に覚え込まされた『イク』という言葉を忠実に訴える。

子宮口を突破し、小袋を犯す妖魔のスペルマ。発射の勢い、着弾の鋭さに惚れ惚れした。「ほら、母として感じるのだ……自らの腹で」

拘束されていた片腕が解放され、無理矢理その手で自分のお腹を触らせられる。

「いや！ いやよ……ああ、やめて……お願い、許してえ……ああ、ひどいいい……」

臍の辺り、子宮がクンクンと今まで感じたことがないほど激しく揺れ動いていた。つかさの手の動きに合わせて胎内の中でゆっくり脈打ち、グルグルと巡る魔族の呪液。

恭介との子が消えていく実感に怖気が背筋を走り抜け、目の前が真っ暗になった。その掌で少女は確かに、命の潰える感触を知ったのだ。

(赤ちゃんが……き、きようすけ……恭介との赤ちゃん……が……ああ……そんな……)

「イヤイヤイヤ！ そんなことウソよ！ ……くあうはああ、あううん！」

ドクン！ 退魔少女は射精挿入されたままの状態で、何かの鼓動に身を突っ張らせた。

「はじまったようだな」

「は、はじまった……!? なにッきやあうん……！」

ドクンドクン、ドクン！ 全身の血が悲鳴を上げる。おぞましい胎動に、亀頭が密着している子宮口が痙攣して熱い愛液が秘裂からビクビクンとしぶく。

「なに、これ……アうーん！」

少女は上気したいやらしい肌へ灼けるような痛みが幾重もはしるのを感じ、鼻にかかった声を漏らす。被虐の花嫁を彩る薔薇が揺れる。

そして身体に渦巻く感触はまるで柔肌を鞭で打擲されるような、身体の奥底で火蓋が切られるような、毛穴の一つ一つから火が噴き上がるような凄まじい衝撃だ。

「ククク。やはり思った通りだ……我が仔はお前の肉体を気に入ったようだぞ……」

「き……気に入る？ 妖魔の仔が私を……ああウツ……ヒイイインッ!?」

刺青のような幾何学模様が、少女の恥丘を基点にして全身へ広がっていく。

少女は神経に麻薬を打ち込まれるような酩酊感と、ハッと意識の醒めるような快美を味わわされてしまう。

「おお、凄いで、つかさ！ 私のをこんなに食いしめて……うつく……っ！」

凄まじい陰圧にロードも顔をしかめ、声が曇った。肉棒が食いちぎられんばかりの締めつけに、そして胎内で渦を巻く炎上した石油のような愛蜜の感触に性衝動が煽られるのだ。

「いやああ……ダメえ！ そ、そこっ、はあ、恭介との赤ちゃんの場所……あ、あなたの場所じゃない……あああ、だめなのにいい……！」

眉を顰め、唇を痙攣させ、頬を上気させ、声を上擦らせ、退魔少女は喘ぐ。恭介の精を受け容れた時以上に奥深く、子宮に根付く、異形の声が胎内に轟く。

「だ、だめえ……ああ、イクウツ……！」

夥しく溢れる愛汁。胎内を灼くような感覚は消えることなく、身体の中をぐるぐる循環する獣欲は美剣を煩悶させる。

「つかさッ……敗けるな……俺が……俺がついてるからッ」

しかし今のつかさには少年の励ましは、うまく聞き取ることができなかつた。

「恭介……そんな……うん……私、妖魔の仔をは、はらんじゃつたああッ……！」

ようやく掌で掬い取つたと思つた希望が闇の底へ落ちていく。少女のドレスごし、その肢体に妖しき紋章が刻まれてしまう。

まるで一生お前は妖魔の情婦として生きるのだと、契約の焼き鏝を押しつけられたよう。

「それこそ我が仔を孕んだ証。……つかさ、私とお前の婚姻を証明するものだ」

（私本当に……妖魔の仔を……。私はもう逃げられないっ）

膣をふさいだままの妖魔の鋭い剛直から立ち上る邪な欲情の熱気。

少女の媚肉は勃起に慰撫され、その存在感の大きさのあまり口を利けない。脳裏には処女を奪い去つた肉鋼の逞しさが絶えず浮かび、喉が勝手にごくんと鳴ってしまう。

「どうした、つかさ……？ 恭介に見られながら、私の逸物で感じてでもいるのか？」

少女は凶星をつかれ、顔を紅潮させながら歪めた。

「ならば……終わりにでもするか……仔を孕ませた今、お前と繋がっている理由はない」

妖魔は紅眼を笑みに歪ませて、ゆつくりと勃起を抜き去つた。

「ああ、ぬ、ぬけ……！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>